医科研病院だより

第46号

発行：東京大学医科学研究所附属病院
令和2年1月15日
〒108-8639 東京都港区白金台4-6-1
代表電話03-3443-8111
ホームページ　https://www.h.ims.u-tokyo.ac.jp/

【CONTENTS】

新年のご挨拶 …… 1
診療科の紹介 …… 2
治療のトピック …… 3
栄養サプリ …… 4

新年のご挨拶

東京大学医科学研究所　所長　山梨　裕司

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

この度は医科学研究所が誇る附属病院の広報誌「医科研病院だより」にて御挨拶の機会を頂き、誠に幸甚と存じます。医科研病院は、国立大学附置研究所に所属する我が国で唯一の附属病院であり、世界トップレベルの基礎研究と、その成果を臨床につなぐ橋渡し研究を進める研究所との緊密な連携の上で、先端医療の開発、推進と地域医療への貢献をバランスよく実践する、唯一無二の病院です。大学院生の頃から35年以上にわたり患者として診療を受けてきた者としては、その優れた、また温かい医療チームの素晴らしさを誇りに思い、また、所長としては、医科研病院で進められている数々の世界最先端の医療開発を誇りに思います。この、独自の基礎研究を起点とする未来に向けた医療開発と、まさに今、疾病に苦しんでおられる皆様への先端医療や標準医療の両立が可能である理由のひとつは、病院・研究所スタッフの献身に加えて、その歴史と伝統にあると思います。

当研究所の母体は北里柴三郎先生が1892年に設立された「大日本私立衛生会附属伝染病研究所」であり、医科研病院は1894年に設置された「伝染病研究所附属医院」を母体とします。それ故、北里先生が重視された「実学」（社会に役立つ学問）、「総合的研究」（基礎と臨床の包括研究）、そして現代の先制医療に通ずる「予防」を中核課題として共有することで、125年の歴史と伝統に裏打ちされた研究所と医科研病院の「一体化」が成されています（「ONE TEAM」です）。例えば、生命の根幹を解き明かす基礎研究や疾患を理解する臨床研究によって積み（↗）（↘）上げられた膨大な情報をヒトの頭脳だけで解析し、理解することは既に不可能です。それ故、研究所の数理・統計学者が、生物学者や附属病院の臨床医・医療スタッフと「ONE TEAM」を作り、研究所のスーパーコンピューター「SHIROKANE」とゲノム医療に最適化した人工知能（AI）を結びつけることで、既にAI医療を実践しています。

皆様が通院されておられる医科研病院は、情報科学、理学、工学、農学、薬学、医学、倫理・公共政策学などの様々な学問が「医科学」をキーワードとして互いに触発して発展する自由で学際的な研究を進める研究所での最新成果を活かしながら、現在と未来の疾患との戦いを続けています。申すまでもなく、医科研の総力を挙げて、この戦いに取り組みますので、皆様にも、御協力、御支援のほど、心よりお願い申し上げます。

末筆ながら、本年が皆様にとってより良き年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

病院クリスマスコンサートが開催されました。

12月18日（水）毎年恒例の病院クリスマスコンサートが病院8階トミーホールで開催されました。今年も聖心女子学院中等科・高等科の生徒さん有志に、歌、ダンス、手話、演奏などが披露していただきました。最後はクリスマスにお馴染みの曲を全員で合唱し、年末に暖かい一時を過ごすことができました。

診療科の紹介

感染免疫内科　診療科長　四柳　宏
感染免疫内科　古賀道子

感染免疫内科はさまざまな感染症の診療を行います。海外渡航後の発熱、性感染症が疑われる方への対応、ウイルス肝炎の診療、HIV感染症の診療などは当科が得意とする分野ですが、その他感染症全般の診療にあたっています。また、渡航外来も当科で診療に当たっております。

感染症は誰もがかかる疾患ですが、個人のプライバシーと密接な関係があります。お一人お一人のプライバシーを守るために外来診察室は扉のある個室としています。また、感染症という病気の性質上、平日の日中ではありますが、専門の医師が診察に当たるようにしています。

当科の対象疾患ですが、HIV感染症、AIDS、肝炎、肺炎、インフルエンザ、結核、梅毒、淋菌感染症、クラミジア感染症、感染性胃腸炎、赤痢、腸チフス、マラリア、デング熱、その他の感染症全般、不明熱など広い範囲に及びます。（↗）

（↘）HIV感染者・AIDS患者さんの診療に関しては、日本国内で最も古くから手がけてきた施設の1つであり、チーム医療の体制を整備してきました。外来には専門のコーディネーターナースを配置して、患者さんのカウンセリングや生活指導に当たっているほか、抗ウイルス薬の服薬指導を専門にしている専任薬剤師も配置し、医師達と緊密な連携をとりながら診療に当たっています。また、病院専属の社会福祉士も当科スタッフと連携して、社会福祉制度の利用をはじめとした生活支援を行っています。患者さんの心のケアには臨床心理士も大きな役割を果たしています。

輸入感染症に関しては国内で市販されていない薬剤を必要とする治療にも対応し、他の医療機関からの相談に応じたりしています。当科のホームページを通じて、海外へ旅行される方や帰国した方々への感染症相談も行っています。

当科は、東京大学医科学研究所に併設されている先端医療研究センター、感染症国際研究センターとの密接な連携のもと種々の研究を進めながら、患者さんに最新かつ最善の治療を行うこと、患者さんと同じ目線に立つことをモットーにしております。12月からは東京大学医科学研究所の研究室（ウイルス感染分野河岡義裕教授）と共同で、エボラウイルスワクチンの臨床研究も始めました。

詳しくは以下のWebサイトをご覧ください。皆様に気軽にご相談いただければと思います。

Webサイト　病院感染免疫内科→　研究室→

治療のトピック

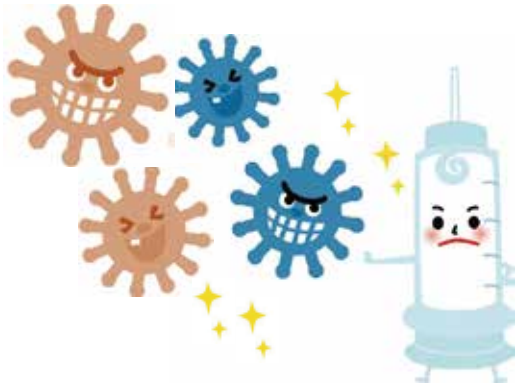
感染免疫内科　安達英輔

1. 現在のHIV治療

現在の抗HIV療法の原型となる多剤併用療法が始まったのは約20年ほど前ですが、それ以来、HIVに感染した方は、日常生活や将来の予定などに制限はなく生活できるようになりました。この20年の間、治療に使う薬も、大きく進歩し、今現在も既存の概念を覆る薬の開発が進んでいます。多剤併用療法が始まった当初は、1日に多くの錠剤を飲まなければならず、日常生活に影響を与えるような副作用もありましたが、現在は、大きな副作用がなく、簡便に飲めるような治療薬が多くあります。多剤併用ということに関しても、複数の薬の合剤を使うことにより、1日1回1錠の内服薬で治療を行うことも可能になりました。最近では、個々の薬のウイルスに対する効果も強くなっていることから、併用する薬の数を減らすことを試みられています。今のところ、1種類の薬で治療を行うことは成功しておりませんが、一部の薬では2種類の薬で治療ができることがわかっており、多剤併用療法と呼ぶ必要もなくなってきたかもしれません。さらに、患者さんが毎日、薬を飲むという負担を軽減するため、経口薬以外の投与法や、1ヶ月に1度の投与が可能な薬、もっと長期間作用することができる薬も開発中です。これらの一部は開発中とはいえ、すでに実際の患者さんに投与する臨床試験が進んでおり、近い将来、日本でご提供できる可能性も高いと考えられています。

HIVの感染を予防するための強力な予防法があることもわかってきました。HIVに感染している人の血液中のウイルスが、治療により検出感度以下になった場合、その人はより健康になっただけでなく、他者にHIVを感染させることがないことが、科学的な方法で証明されました。「U=U（Undetectable=Untransmittable）」というメッセージが世界中で発信されていますが、これはHIVが血液から検出限界以下になる（Undetectable）=感染しない（Untransmittable）」という意味です。このような現状から、我々としては、HIVに感染している人の健康を守り、伝搬を防ぐために、まずは一人でも多くの人に検査を受けていただきたいと思っております。検査は保健所等で、無料で受けることができますし、病院で受ける場合は検査結果の詳しい説明を受けることもできますし、他の感染症について相談をすることもできます。

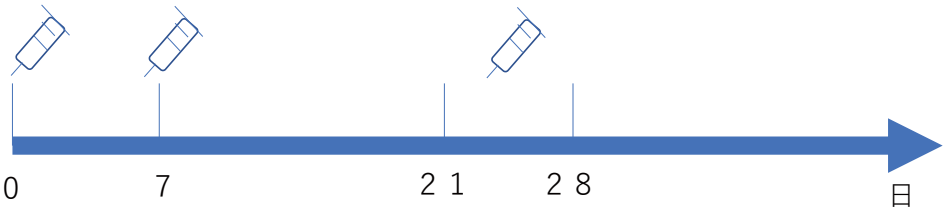
https://www.avert.org/infographics/u~u



2.　海外渡航前に必要なワクチン接種

感染症はそれぞれの地域の病原体によって引き起こされるため、流行は地域によって異なることがこの疾患の特徴です。予防のためのプログラムも各国それぞれに異なっているため、海外渡航が（↗）（↘）増えた近年の状況に、日本のワクチン政策が対応できていないこともあります。最近の話題ですが、今年度より、これまで海外で一般的に使われていた狂犬病ワクチンが国内でも接種可能となりました。狂犬病は日本では動物も含めて発症が確認されておりませんが、中国やフィリピン、東南アジア、南アジアなど日本と地理的に近く、社会的にも密接なつながりがある地域で、現在でも致死的な病気の一つとして大きな問題となっています。新しく承認されたワクチンを使うと、1週間の間隔で2回の接種をすることにより、最短で1週間で渡航前の予防的な免疫をつけることができるようになりました。現在のところ、供給が十分ではないのですが、海外から輸入したワクチンも併用して対応することにより、急に該当地域への渡航が決まった場合でも、当院や各地の渡航クリニックで狂犬病の予防ができるようになっています。

噛傷前の狂犬病ワクチン



1回目を0日すると、0、7、21～28日のスケジュールで合計３回接種します。時間がない場合は０、７日の２回の接種でも十分な免疫をつけることができます。

栄養サプリ

1人分だけ作るのが面倒・・。

意外と簡単♪お家でお粥が作れます

～食欲が無い時や体調不良の時などに、試してみてはいかがでしょう～

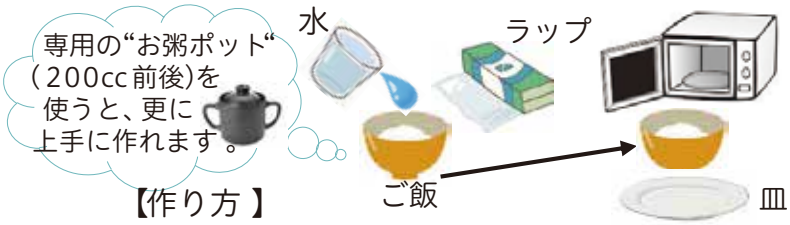
自宅で手軽に作れます

ご飯と一緒に炊けます

【作り方】

1. 深めの耐熱容器（茶碗や湯飲み等）に米30g（大さじ2杯+1/2杯）と、水150gを入れます。
2. 炊飯器で普通のご飯を炊くついでに、1.を真ん中にセットして（軽くて浮いても大丈夫）スイッチを入れます。
3. ご飯が炊ければ、お粥も出来上がりです。

冷やご飯で作れます



【作り方】

1. 深めの耐熱容器（お茶碗等）に冷やご飯100g（軽く1杯）と水100gを入れてフワッと余裕をもたせてラップをします。
2. 600Wで3分電子レンジにかけます。吹きこぼれやすいので皿を敷くと良いでしょう。（500Wで3分40秒、700Wで2分30秒）
3. 出来上がったら、ラップをしたまましばらく蒸らすと、よりトロッとしたお粥に仕上がります。お好みでめしあがれ。

詳しい情報を知りたい方や食事のご相談がある方は栄養相談にてうけたまわっております。

栄養管理部

その他のご紹介

スイッチ一つでお粥や味噌汁も作れます。

非常食として保存しておくのも便利です。

お粥専用“お粥ジャー”や、レトルト粥があります。

◆病院からのお知らせ◆

●臨床検体の取扱いにつきまして

当院での保存・追加採取検体を用いた臨床研究名をお知りになりたい方は http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/ore/IMSUT_ORE_7.html をご覧ください。

東京大学医科学研究所附属病院・ご利用案内

診　療　科

内　科（総合、血液腫瘍、感染症、アレルギー・免疫、消化器）
外　科（一般、腫瘍、消化器、乳腺）、整形外科（関節）
脳腫瘍外科、放射線科、麻酔科、遺伝相談

外来診療日

月曜日～金曜日（祝日および年末年始を除く）

診療受付時間

８：３０～１１：３０（初診・再診）
１２：３０～１６：００（再診のみ）
※予約時間の１５分前までに受付にお越しください。
（確実にご受診いただくために、ぜひ予約をお取りください）

予約専用電話（予約受付および変更）
診察：０３－５４４９－５５６０
検査：０３－５４４９－５３５５
受付時間　８：３０～１７：００（外来診療日のみ）

アクセス

- 東京メトロ南北線・都営地下鉄三田線で「白金台駅」下車
- JR山手線目黒駅東口から都バス品93大井町競馬場行で「白金台駅」下車、
  あるいは都バス黒77千駄ケ谷行か橋86新橋駅行で「東大医科研西門下車」、
  または駅より歩いて約15分、タクシーで約５分（１メーター）
- JR品川駅から都バス品93目黒駅行で「白金台駅」下車
- 東京メトロ日比谷線広尾駅から都バス広尾橋から黒77
  または橋86目黒駅行で「東大医科研病院西門」下車